

帰島10周年を契機に

新たな施策 官民一体となって



三宅島の噴火は、2000年(平成12年)6月26日に緊急火山情報。7月8日雄山頂上から噴煙800m、8月18日には、白色噴煙の高さ約1万4千mなど最大規模の噴火となった。その間、日に何百回と地震。ついに9月1日に、24日の間に全島避難の指

2月1日に帰島10周年を迎えた三宅島。噴火前に比べての人口の減少や産業復興の遅れが続いている。様々な問題もあるが、空き家や畑、山林の流動化を図り島外から人を呼び込むなどの施策を進めるなどして、この節目を復興再生の新たな歩みを進める契機とすることが必要だ。

示。防災関係者を除き全島民が島を離れた。05年(平成17年)2月1日に避難指示解除・高濃度地区公示で島の45%に居住、立ち入り禁止など厳しいものであった。そして今年、2月1日で帰島10周年。6、7月に噴火15周年となる。

災害前の国勢調査は、1995年(平成7年)によると人口3千828人、1722世帯となっていた。現在と比較すると人口減は、1128人、世帯数では、18世帯減である。しかし実態島民数は、2千人前後であろうとの見方が大方である。それは、公務員約200人と建設業約300人の内、島外からの人々と、島民も病院通いのために、内地の子供家族と同居や部屋を持ち、行ったり来たりがあり、流動人口化している。

現在、注目すべきは二点ある。偲び難いが「帰りたい」でも帰れなかった「高齢者化した在京者の島内にある空き家・宅地と畑、山林の流動化である。若者を呼び込み、または三宅島を愛し、定年後の終の棲家する人もある。在京者の皆さんも三宅島の復興・再生に理解を示し、活用にご協力をお願いしたい。

二点目は、村の「空き家バンク制度」も不動産業不在のため頓挫。この度、(株)音丸建設不動産事業部を立ち上げ宅地建物取引主任者として堀井美也子さん(元・三池地区出身で旧姓・金城さん)が活躍をしている。(連絡先☎100-1211 三宅村坪田1211番地 音丸建設不動産事業部 TEL 04994-8-5650 FAX 04994-8-5651)。

帰島10年目の三宅島の2月1日現在の人口は、2千700人、世帯数は、1740世帯と修正発表。『みやけ広報』は、平成25年5月号から平成27年1月号までの世帯数は約20世帯少ないと修正

加えて、農業、漁業、

そのために、今回農地を貸し借りできる「農用地利用集積計画」と「認

定農業者制度」がで、資金融資や税制などの支援をする。皆さんご存知の阿古の販売農家の大年健士さんが農業委員会の会長。役場の相談窓口は、産業農林水産係担当長谷川氏(TEL 04994-151009)在京者も安心して任せることができる。

三宅島新報

発行所：三宅島ふるさと再生ネットワーク
〒100-1101
東京都三宅島三宅村神着 320-2
Tel. 090-4922-0798
発行人：会長 佐藤就之

帰島10周年記念

事務局便り

○第40回世話人会(総会準備)の開催
3月16日(月)
18:30～20:30

喫茶室ルノアール 巣鴨駅前店にて世話人会を行います。

○2015年度 ふるさとネット総会
4月11日(土)
18:00～20:00

喫茶室ルノアール 巣鴨駅前店にて開催いたします。

【三宅島ふるさとネット事務局】
郵便番号：173-0005
住所：板橋区仲宿 25-6
電話：03(3963)5678
FAX：03(3963)5697
担当：栗原

災害を語る① 永井タケ子さん

母の想い引き継ぎ家を



ふれあい集会の日に 笑顔の母と永井さん

東京都町田市で生活する永井タケ子さんは、2000年の三宅島全島避難の際、島で暮らす母親を引き取った。その後、「早く島に帰りたい」と言いながら亡くなった母親の気持ちを大切にするために島の家を守り続けているタケ子さん。帰島10周年を期に、戻ること信じていた母との思い出を寄稿していただいた。

2月2日。帰島10周年。全島避難してから14年6カ月。帰島10周年という節目に、母の避難生活を振り返ってみた。亡くなった子の年を数える、というが、亡くなった親の年を今年も数えている娘である。母は、「戻りてえな、戻りてえな」と言いながら2007年の元旦に逝ってしまった。92歳だった。2000年8月、全島



永井さんが守る三宅の家

避難が決まって、一足先に母は娘の所へ避難することにした。足の不自由な母は、皆さんの足手まといにならないようにしなくてはとの思いからだった。

避難後の母の胸中を思うと今も切なく辛い。「まだガスは収まらんかよ」と何百回つぶやいたことだろう。つぶやきと共に、秋に…。夏着しか持ってきたなかった母に衣類を整えると、「まさか今どきまでいるとは思わなかったよ。着るもんは、山ほどあるにな。新しい物を買わしてわりいな」また、「大根は播けん」と思ったが、さつまは掘れると思っていたよ」など、残したままの島への母の想

いが私の胸に響く毎日であつた。

しかし、母は切り換えた。「泣いてばかりいたら申し訳ねえよな。我慢しなきゃな」と言つて、洗濯や、草とり等、仕事を付けてはやつてくれたのである。足を引かずつて。

母が一番辛かつたのは、島の人たちと連絡がとれなかつたことである。数カ月後であつたらうか。社協の方から電話を頂いた。「ふれあい集会」の開催の知らせであつた。

一人で歩けない人は…

第1回目の集会。車椅子を押して行くと、懐かしい声があつちからもこつちからも。母の顔がほころぶ。「元氣だったかよ。会いたかつたよ」「今度は島で会うべよ」と、多くの友と語り合つた母。その後もふれあい集会で再会するのだった。全回、参加させて頂き、元氣をもらつて町田に帰るのだった。その後、住所録を作成

して頂き、電話で話せるようになったことは有難かつた。しかし、年を重ねるごとに、辛い報せも届くようになった。入院したとか、亡くなつたという報せ。「通夜に連れて行つてくりよ」と言う母。何処迄もいった。10回は伺つた。

一方、一時帰島が始まつたが、一人で歩けない人は駄目ということ母は一度も行くことは叶わなかつた。悔しがつた母。辛い娘。

そして、ついに帰島。だが、遅すぎた。独り暮らしは厳しい。車椅子の生活になつてしまつていたから。しかし、短期間ではあつたが、4回、島へ戻つた。06年の8月のお盆に戻つた時は、「このまま、家に残るよ」と言う母を連れ帰る苦しさ。辛かつた。4カ月後の07年1月1日。「ありがとよ」の言葉を残し、逝つてしまつた。私はできる限り、母の大事な家を守つていきたいと思つている。あれ程、戻りたかつた母のために。

災害を語る② みやこ 京町さん

被災者から支援者へ転身



1995年の阪神淡路大震災で、神戸の実家が被害を受けた女優の京町さん。それを期に震災うつ状態になったが、三宅の島民の支援を始めたことが転機になり、その後多くの人に支えられながら防災コーディネーターとして活動を続けてきた。そんな京町さんに災害との関わりを寄稿していただいた。

DTPAメンバーが神戸を訪れた際に、前列右から4人目が京町さん。その左隣が黒田裕子さん

阪神淡路大震災から20年目の1月17日を迎えました。私は寒い、冷たい風の朝、人々は神戸、東遊園地に灯された希望の灯りに祈りを捧げました。今年は15万人近い方々が訪れ、昨年の約3倍でした。私の中で止まっていた時計は相変わらず

あの日 町が消えた
ほんの一瞬で 夢が散った
築き上げてきたものが手のひらのすきまから
握りしめても つかめない
くらい落ちていった
あの日 ぼくたちは 行き場所をなくした
それでも夜明けは訪れる
何事もなかったように
それでも 夜明けは訪れる
ぼくたちは ぼくたち自身の夜明けを しっかりと 見つめなければならなかった

防災士として活動
私が震災うつ状態から、何かしなければと思ったのは、三宅島から東海汽船に乗り込む全島避難を見たからです。そして、今私がこうして防

らず、秒針を前に進めては、止まったり、戻ったり。それは広島市の平和の時計のようです。
三宅島も10年ですね。私が初めて三宅島の方々にお会いしたのは神戸の「はるかひまわり」を練馬区で学校を回り紙芝居や歌で震災を伝えていたときでした。三宅島から避難している方々に出会いました。
また、あきる野に歌いにも行きました。そこでは、社会福祉協議会の三谷さんにお会いし、竹芝でのカウントダウンやふれあい集会の司会をさせていただきました。NHKカウントダウンでは「みんな三宅島に帰ろう」が良いと神着太鼓の方々と話し合い、そのかけ声で2000年が明けました。

防災士になったり、続けていられるのはあの日三宅島支援で出会った方々と灯した神戸の希望の灯りにあります。
1・17の遺族の皆様や三宅島の方々に支えられてゆつくりと進んでは、立ち止まり、ほんとに少しづつ。
故三谷さん、約束の神戸のひまわりを三宅島に咲かせましたよ。あなたの二つのふるさとが、一つになりました。そこで、ふるさとネットの佐藤会長と出会いましたよ。
故黒田裕子さん、初めてお会いした10年前、厳しくて優しい愛のいっぱい持ったお姉様、暑い刈羽や神戸の地藏盆、大切な思い出です。いつも「身体大丈夫？」「どうしたの？」と電話してくれました。携帯番号消せないでいます。私は黒田さんにはなれないから、仮設のマザー・テレサを伝えますね。
故齋藤實先生、一昨年飲みすぎて約束忘れてましたね。今年は忘れないと忘年会の翌日メールく

ださり、講演の日程や内容も計画したのに、約束守ってくれないんじゃないかな？寂しいよ、先生。年末先生のメールにラブレターを書いておきましたよ。
一期一会伝えるために
東京で阪神淡路大震災の記憶を伝えるのは孤独感との闘いです。昨年、関節リウマチがわかりました。
ここ5年くらい身体中痛くて思うように動かせず原因不明が続いてました。思えば20年、震災うつ状態に始まり体調との闘い、ただ思うのは、「沢山の出会いはいつも私を支えてくれたこと」です。一期一会とはまさしくこのようなことを言うのでしょうか。
「できる人ができるときに、できることをする」これからも自分のできることで阪神淡路、三宅島、そしてたくさんのお会った方々を伝えていきたいと望んでおります。戦後70年、「平和な年でありますように」。

避難時の恩返しのために

酒井副会長 カラオケ会の世話役を



参加者に三宅の特産物を贈る酒井副会長

酒井さんは噴火後、東京都練馬区関町の都営住宅に住むふるさとネット副会長の酒井一豊さんは、高齢化が深刻な問題となっている同住宅シルバーカラオケ会の実質的な世話役を務めている。酒井さんがこのような活動から頼りにされる存在になっている。

東京都練馬区関町の都営住宅に住むふるさとネット副会長の酒井一豊さんは、2月1日に同住宅の集会場で行われたカラオケ同好会のカラオケ大会に、牛乳煎餅や明日葉などの三宅島の名産品を持参した。

酒井さんがカラオケ会に参加するようになったのは、2、3年前のこと。団地に住む知り合いから紹介されたのがきっかけだ。この会のメンバーは15、20人程で、ほとんどが80歳以上のため、今では、週2回の活動を最年少である71歳の酒井さんが取り仕切っている。

練馬区の都営住宅に住む在京島民で、ふるさとネット副会長の酒井一豊さんは、高齢化が深刻な問題となっている同住宅シルバーカラオケ会の実質的な世話役を務めている。酒井さんがこのような活動から頼りにされる存在になっている。

「いつもいる人が来なくなると心配。自治会長などと部屋を見に行ったこともある」と語る酒井さん。近年、立て続けにお年寄りが亡くなり、自治会でも問題になっているという。酒井さんが世話役として活動が続いているのは、避難時お世話になった恩返しのためという。「自分の体と相

ある現状だ。談しつやつやしています。が、こうした活動をこれからも減らさないように頑張りたい」と酒井さんは語る。

今号は、帰島10周年記念号として、お二人の寄稿を掲載しました。改めて災害がもたらす影響の大きさを実感しました。未だ復興は道半ばですが、佐藤会長の言葉にあるように、帰島10年を節目にすることが重要だと感じています。

(DTPA一同)

【お便り】

故郷へ

元三宅高校事務長

牧田和雄さん(66・埼玉県)

2年前、高齢者(65歳以上)

の仲間入りをした。

終戦後、満州から母の故郷の三宅島に引き揚げ、炭焼きをしていた父が東京で職を捜し、家族5人で三宅を出たのは私が小学校6年の夏休みも終わりのころだった。

昭和46年、都内の私大を出た私は東京都の事務職員に採用され、二度三宅島に赴任した。昭和58年に教育庁三宅出張所、平成11年には三宅高校。奇しくも二度とも噴火に遭った。平成12年の噴火では全島避難となり、小・中・高校は全寮制で閉校となっていた旧秋川高校に避難した。帰島する前に他校へ異動となってしまったのは、非常に残念であった。

念であった。

家族5人で島を出てから55年、いま三宅に残る数人を除き、旧神着小学校の同級生のほとんどの消息を私は知らない。最後は生まれ育った三宅の土に還りたい、そう想っているのは私一人だけだろうか。

「あしたば音頭」CDありがとう
Eさん(伊ヶ谷地区)

先日は、あしたば音頭のCDを家まで届けて頂きありがとうございました。色々活用させていただきます。ほんの気持ちですが三宅島ふるさとネットワークに寄付させていただきます。宜しく願いいたします。

※CDは締め切りました

【ご寄付者名】(12月9日～2月2日)

齋藤實様、山口豊様、佐藤就之様、石井藤枝様、永井タケ子様、佐藤宗ノ子様 ありがとうございます。